

16 節の「肉に従って」という言葉は、パウロにおいては「霊に従って」の対句であり、「人間の側の働きとか価値に従って」という意味です。キリストがわたしたちのために死なれたことを体験するまでは、自分のことも他の人のことも、すべて人間の側の働きとか価値に従って測り、それを根拠にして判断していました。しかし、キリストが総ての人のために死んだことを知った今からは、そのような判断をしないと、パウロは言うのです。パウロは 17 節で、私たちのために死んで復活されたキリストに全存在を投じ、この方と共に生きる場を「キリストに結ばれて」(直訳は「キリストにある」という言葉で表現します。私たちのために死んだキリストに合わせて、私たちは死に、復活させられたキリストにあって別の私たち、新しい私たちが生き始めたのです。パウロは、このような出来事は、全て神さまから出ることであり、人間が関与できる事柄ではないと言います。

創世記の天地創造神話では、人間の誕生を喜ぶ神さまと天地万物の歓喜が響き渡っています。この天地創造神話は、神さまと人間とは本来親しい関係であることを素朴に語っています。ところが、この神さまと人間との親しい交わりが壊れ、人間は神さまに背く者になったのです。これは人間が自ら神になろうとした高ぶりの結果であることが、創世記 3 章で語られています。人間は自分たちが神さまから離れていることを意識し、神さまが敵意をもって自分たちを扱うことを恐れて、宥めの供え物を捧げたりして、神さまと和解することを努めてきました。それは人の側からの和解です。しかし、キリストにおいては一切そのような人間の側からの供え物や条件づくりは求められていません。神さまが一方的に和解の場を備えてくださっているのです。

パウロはロマ 5:8 でイエスの十字架上の死は、神の子が敵対する者のために死んだ出来事であると言っています。イエスの死によって敵対関係の原因であった罪が取り除かれ、和解が成立したのです。21 節で、このことを言っています。「和解する」という動詞の主語はいつも神さまです。神さまが世と和解されるのです。人間が供え物をして神さまと和解するのではありません。人が主語になるときはいつも「和解させられる」と受動態で用いられます。神さまは御子の死という犠牲をも惜しまないで、世界に和解を与えられたのです。この意味で福音が提示する和解は「神の和解」なのです。この神との「和解」をもって、パウロはコリントの教会の人たちとの和解を求めているのです。この神との「和解」の福音に生きること、これが「和解」の福音を語ること、仕えることであると、パウロは勧めているのです。パウロが語る福音は、イエスの十字架の死と復活です。